

【一薬の魅力②④西日本唯一の漢方薬学科〈7〉薬用植物を見分けられる学生に 独自科目「薬用植物利用学」開講】

2025/6/5公開



西日本で唯一、漢方薬学科がある第一薬科大学で5月26日、独自科目「薬用植物利用学」が始まりました。漢方薬の生薬として使われる薬用植物を見分けられるようになることなどが目的。新しいカリキュラムになって盛り込まれたそうで、担当の森永紀教授は「先輩たちも受けたことがない科目です」とPRしていました。

漢方薬に配合される生薬や天然物に起源をもつ医薬品などを取り扱うためには、もともとなる植物や動物、鉱物の特徴、利用目的などを知る必要があります。この科目では、春と秋に野山や河川敷へ出向き、薬草や薬木の探索を行って薬用植物を見分けられることを目指した「薬用植物観察会」を実施。座学では薬用植物の栽培や採取、加工、利用法などを学びます。

2年を対象にしたこの講義では、森永教授が「薬用植物を利用していたのは人間ではなく、チンパンジーでした」と話し、これまでの研究によって薬草利用には人類の誕生以前から500万年の歴史があることが判明したことを説明。

また、本学が2023年、「日本の植物分類学の父」である牧野富太郎博士（1862～1957）の業績を顕彰する高知県立牧野植物園（高知市）と学術連携協定を締結したことや、福岡県からの委託で昨年、県内に自生している薬用植物の調査を開始し、今年も継続して行っていることを伝えました。

生薬は中国産が約8割を占めていますが、森永教授は「中国でのニーズが高まり、価格が高騰。『薬用植物を日本で生産できないか?』という意識が高まってきました」と指摘。現在、国内では北海道や熊本県、奈良県で栽培が盛んですが、農林水産省のホームページに掲載されているグラフを確認したところ、福岡県はほぼゼロのような状態です。

県も中山間地域の活性化の一環として薬用植物を栽培していこうと、漢方薬学科がある本学に委託し、本学の教員らが調査にあたっているわけです。

「春の薬用植物観察会」と称して31日には、学生らが教員らとともに自然豊かな皿倉山（北九州市）へ。皿倉山にも薬用植物がみられるそうで、本学に協力してくださった地元の公益社団法人「八幡薬剤師会」の薬用植物園担当委員・坂本義徳氏の案内で薬用植物園も訪れ、さまざまな植物を目の当たりにしました。

